

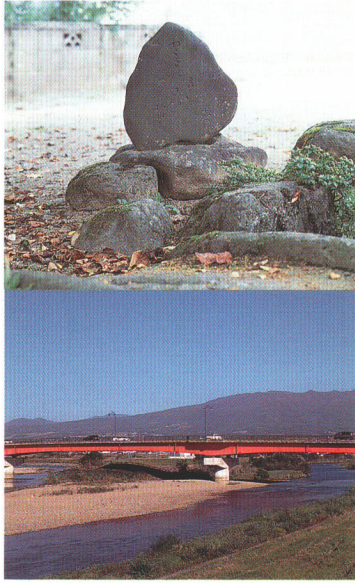
「屋号とのれん」の町として知られる塩川町。商店の軒先には、藍色に染め抜かれた風情あるのれんがたなびき、上方交易で栄えたかつての面影を残している。藩政時代には、会津藩の統治下にあり、もともとは城下町の性格の強かった塩川が、多数の舟が往来し、商人や職人が行



き交う商業都市へと発達していったその背景には、阿賀川舟運と米沢街道というふたつの道の物語があった。

阿賀川は、猪苗代湖を源とする日橋川や檜原の山々から流れる大塩川、尾瀬から流れる只見川などが流入する、豊潤な流れの川として知られている。越後山脈を横断し、やがては阿賀野川となり、新潟平野へ続くこの川を利用した舟運は、会津の歴代藩主の願いであった。しかし当時の阿賀川は「揚川」と呼ばれるほど水かさが多く、難所もあり、舟運による廻米船の実現には至らなかった。

貞享元年（一六八四）、塩川村の肝煎りである栗村権七郎による難所の改修と廻



米船の建造により、阿賀川の舟運は一挙に開花する。塩川は、この阿賀川舟運の起点の地であった。貞享三年（一六八六）には、数千石の米を積んだ船が中継地、津川に輸送され、元禄十年（一六九七）には年間約五万俵の米が大阪へ運ばれるようになる。また、戻り荷には会津では手に入らない越後塩を中心に、上方物の綿花、反物、茶、鯉、昆布などが阿賀川を溯って塩川に陸揚げされ、やがて町は会津の代表的な物流拠点となっていく。

塩川の商業文化を育んだもうひとつの道、米沢街道は、若松より北へ十四里余り、上杉氏の城下米沢へと通じる道であり、古くから藩主の通行や、商用の荷などの経済輸送に利用され、さらには領地支配の要として重要とされてきた。慶長十三年（一六〇八）、蒲生秀行の代に、塩川を通ることが定められ、それまで金川通りと呼ばれていた街道は、塩川通りと改められ、米沢街道の本街道となる。町には駅所と市が開設され、舟運の発達とも相成って、いつしか町は船問屋や船改所が建ち並び、多くの商人や職人、旅人たちが行き交う在郷町となった。

ふたつの道は物や人の流れを活発にしたばかりでなく、全国の文化や芸能を塩川に伝え、音曲や人形芝居、演劇などの

阿賀川舟運と米沢街道。

塩川が商業都市としての性格をしいに強めていったその背景には、阿賀川舟運と米沢街道というふたつの道の存在があった。これらの道は、会津では手に入らない塩や上方の特産品はもちろん、全国各地の文化をもたらし、塩川に粹と風雅を運んだ。

ふたつの道の物語。

文化遺産と伝統を生み出すのにも役立つ。なかでも、庶民文化の華である俳句は、一重三石が安永年間（一七七二〜一七八〇）にその礎を築き、幕末期には、会津の蕪村といわれた斎藤草雄が登場し、塩川俳壇の黄金時代を築き上げる。その後明治に入ると、阜雄の弟子の豊島松圃が登場。松圃は、春湖、等載など、当時の中央俳壇の緒家と交わり、才名を表し「東奥に松圃あり」とうたわれた。現在でも御清水公園には、松圃の「湧く音の月に静まる清水かな」の句碑が建ち、ふたつの道が運んだ文化を今に伝えている。

